祭り囃子が鳴る前に

～祭りの準備と人々の暮らし～

文＝金丸弘美

祭りが終わると、御神酒を参加した人で分け飲むという直会（なおらい）というのがある。そのときに、今年の祭りはどうだったとか、そういえば、一昨年はこうだったとか、昔はこうだったとか、さまざまな、祭りでのできごとが人々の間に去来する。そこでは毎年の祭りが連綿と続いているような不思議な感覚の雰囲気におそわれる。そんな気分になるのも、世代が受け継いできたものを改めて確認しあい、生の存在を知り、感謝しているのかもしれない。このときから、また次の年のお祭りが始まる。

それぞれに、祭りには準備がある。お囃子の練習や、山車の掃除や飾りつけ、祭りの手順の確認や、家で用意する料理など、さまざまなことがある。町で貢献のある人が代表に選ばれ、それぞれに協議をして、祭りを司るための準備が進んでいく。着るものだってそうだ。着るものには、たいてい何処でも決まりがあって、それぞれに町の誇りがあるから、着るものの準備だって、馬鹿にならない。どういう意匠にするかということで、一年がかりで会議を持つところもある。

佃煮で有名な小さな島である佃島に行ったときのことだが、ある家の女将さんが、箪笥の中から出してくれたのは、綺麗に洗濯され糊の利いた浴衣であった。それも昔使った意匠の違うものもあって、そのデザインを見ているだけでも楽しくなってしまう。浴衣も祭りではちゃんと揃いのものがあって、後ろの端折り方まで決まっている。それができないと粋ではないというわけだ。だからその浴衣を作って準備するということもお祭りの大切な行事なのである。

祭りの日、家に上がると、大きな独特の太巻きや、するめの佃煮や、枝豆の佃煮があった。そこだけの祭り料理で、みんなをもてなすのである。その日ばかりは、神様と同時にお客さんを迎える。料理の準備も大変だが、多くの人々を迎えられるということは、その家の繁栄でもあるのだ。

そんな似たような話は、浅草の古くからの家の女将さんからも聞いた。こちらは揃いの半纏が町ごとにあって、そこの家で揃えて特注しているのだという。出入りの人に着てもらうしきたりだが、その半纏が一着三万円。それがなんと五十着も用意してあって、大切な出入りの人たちに貸し出される。

ひとつひとつに番号がふってあって、誰に貸し出したかわかるようになっている。お決まりの半纏だから、おいそれとは誰にでも着れるというものではない。それを着ないことには町内の神輿は担がせてもらえない。半纏を着たい、神輿を担ぎたいゆえに、せっせと余所から通って、女将さんに親しく顔を知ってもらいにくる人もいるくらいだ。

女将さんは、揃いの名前の入った半纏を用意して、自分が管理していることが自慢げであった。

「終わると、いつもクリーニングに出してね、次の年のために用意しておくんだけど、必ず二～三着なくなるんだよ。その度に追加しな

かつては春の3月17、18日に行われていたという浅草の三社祭り。現在は、5月17、18日に近い金土日に行われるようになった。この祭りが終わると本格的な夏の到来だ。本社神輿の他に氏子44ケ町の大小の神輿が100あまり、町を練り歩く。日本でも大きな祭りの一つとして数えられ、観客は150万人とも言われるが、各町をのぞくと、昔ながらに、酒やお赤飯で迎えるところもあり、なにより、極上の語らいのある、人情豊かな人々の姿がある。子供たちの姿がなんとも微笑ましい。

きゃなんない。どうしたものかね」

と、数が合わなくなる半纏を困ったものだといいつつ、それだけみんなが欲しがる半纏が誇りでもあるかのようだった。

もう一つの女将さんの自慢は、お祭りにお赤飯を炊いて、来た人に振る舞うことであった。

その半纏や浴衣の準備、料理の準備ともてなしの中に、祭りを見るかのようだ。

祭りとはよくできていて、その地域地域のさまざまな要素がすべてからまってくる。一つ欠けたってお祭りにはならない。料理も町に飾られる提灯一つもおろそかにできない。一つが動きだすと、それに連動するかのように、町が動きだす。

祭りの準備が本格的に始まるのは、祭りの一月前くらいだろうが、そうなると本当に町が動きだす。面白いもので、提灯は何処、手拭いは何処と、それぞれに必要なものが、ちゃんと祭りには地域がからむようになっているのだ。それぞれの地域に住む人々の生きる知恵が積み重なっている。一つ一つの人々の行為が神様を迎えることであり、神様に近づく行為でもあるが、もう一つ言えることは祭りはコミュニティそのものであるということだ。そんなところが、日本の祭りの面白いところに違いない。

祭りといえば、日本には太鼓が欠かせない。太鼓の響きは、誰しも郷愁を誘うはずである。その太鼓造りで有名な店がある。地下鉄銀座線で浅草駅の一つ手前田原町駅を降りると、すぐ目の前に神輿や太鼓を飾ったショウルームのあるビルが目に入る。宮本卯之助商店である。

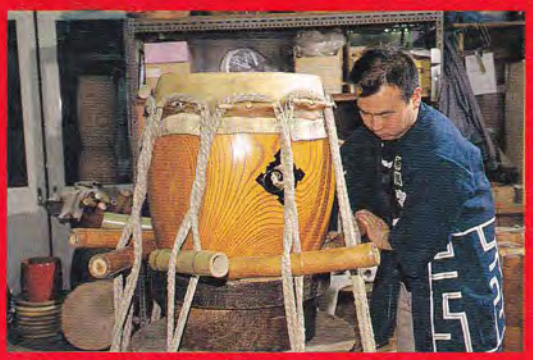
江戸末期の一八六一年に創業されたというこの店は太鼓造りの店として知られ、明治に入ってからは神輿も造るようになり、とりわけ昭和二五年と二七年に浅草の本神輿を手掛けてからは、お神輿でも知られるようになったのだという。この本店は浅草の言問橋の近くにあって、そこに工場がある。古い構えの店の奥には、太鼓や神輿を造る作業場があって、全国各地から注文のきた太鼓や神輿を造る。

太鼓だけでも、その数は一年に二〜三千個にものぼるという。修復も含めると、その数はかなりのものだ。最近は太鼓を造るところや張り替えをしてくれる所が地方では少なくなってきて、そんな事情もあって、地方からの注文もかなりあるという。

太鼓は、神社やお寺や昔からの注文主のはもちろんのこと、新興住宅地で祭りをしたいというので注文を受けるもの、最近では新たにできた太鼓サークルといったところもあって、太鼓の人気の裾野は広い。海外でも和太鼓のグループは増えているということだった。アメリカでも四〇〇近いグループがあるという。

お祭りに欠かせない太鼓だが、その祭りの準備は、五月の浅草の大祭三社祭りの前から秋にかけてが、多忙になってくる。夏から収穫の秋にかけては、豊作を祝い一年を感謝する習慣が多いことを考えると、夏から秋にかけての祭りの前がもっとも多忙になるのも無理もない。

太鼓造りの作業場では、ダントン、ダントン、ダントンと、リズムのいい音が響く。太鼓の皮を張る木槌の音だ。円上の台に中をくり抜いた欅の太鼓の胴が縦に置かれ、それになめした皮が張られる。皮は地域によって牛を使うところと馬を使うところとあるそうだ。皮の縁には鉄の芯の入った細い竹筒が等間隔で差し込まれ、竹筒には麻の縄が掛けられ、それを台の下の張り出した何本



春から秋にかけては、各地のお祭りの準備にお神輿造りも太鼓造りも追われる。お神輿も地方によって飾りが違う。購入品ばかりではなく、最近では太鼓も神輿もレンタルというのもある。いかにも現代らしい。特に新興の住宅地に多いらしいが、新しい町では、かつての町のように担当者を分担して専用の場所を設けて保管管理するということが地元で難しいということも反映しているらしい。

Photo／山口卓也

もの木に掛け、皮が締め上げられる。その竹筒を木槌で叩き、少しずつ麻の縄を締めていくことによって、皮を張り、いい音のする太鼓を造りあげるのである。

皮を張ると、次に鋲を打ち込んでいく。これもリズムの仕事だ。一尺五寸のもので、鋲だけでも三百本もある。それが手際よく、一定のリズムを刻みながら打ち込まれる様子は見ていて気持ちがいい。なるほど、太鼓の響きの裏には、完成された響き同様のリズムがあるのだと知らされる。

太鼓の皮を張るのは、東京生まれの飯塚紀夫さん。まだ二七歳の彼は、太鼓を張るのに三年と経験こそ浅いが、その逞しい腕からは、力強いリズムが刻まれる。まるで太鼓と話しあっているかのようだ。その作業ぶりをじっと傍らで、親方の坂本敏夫さん(五六歳)が体を乗り出すように見守る。作業を見守るというより、飯塚さんの作業の音を、太鼓との話し具合を聴くといった方がいいかもしれない。とりあえず皮が張られて鋲を打ち込む前に音を出して、飯塚さんが、音の具合を坂本さんに確認する。その音を聴いて、坂本さんが、うなずいたり、首を横にふったり。ひとつひとつの音を確認する。

飯塚さんに言わせると「リズムを掴むのと、音の調整が難しい」のだそうだ。太鼓造りは音造りであるということを、改めて知らされる。

「音で見ますね」と親方の坂本さん。

太鼓職人の坂本さんは、茨城出身。出身地の六月のあやめ祭り、八月の夏祭りには、自分の故郷で、自ら造った太鼓を打つ太鼓好き、祭り好きでもある。

「太鼓造りはリズム」という坂本さん。

「リズムよく叩いて張っていかないと、皮が切れたりするんです。叩く音で調子を見る。寺だと、お寺さんの音が高くてはいけない。拝んでも神さんに通じないといいますね。祭り太鼓は、跳ね返ってくるというか、ポンと響くのがいい」

太鼓の胴は欅が最高とされるが、百年くらいたった欅の丸太を切って、これを乾燥させて、くり抜き、さらに乾燥させる。その間に亀裂が入って使えないものもあって、太鼓になるのは、六割くらいだという。しかも切り出してから、太鼓に使用するまでには、さらに十年の歳月が必要と聞いて驚かされた。和太鼓独自の体の芯に響いてくるような音には、長い長い歴史が刻まれているのだ。そんなことを考えると、和太鼓の独自の響きは、山深い神々の元からやってきたのだと、思えたりもする。実際、太鼓をいつまでも聴いていると、体の底からじんじんと伝わってくるような、独自のリズムに、波長が合ってくるから不思議だ。

快い太鼓のリズムは、ときに涙を誘うほどに体をゆさぶり快感になることさえある。それはお祭りの直中にいたことのある人なら、誰しもが経験することだ。

出来上がった太鼓は各地に運ばれる。祭りの準備が始まると太鼓の音が町や村で響きだす。その音に合わせるかのように、各家々での祭りの準備が始まる。あちらの土地、こちらの土地の女将さんたちは、どんな料理を一所懸命作っているのだろう。

新しい祭りの誕生と地域の発展

最近でも新たな祭りが生まれたりしているが、まったく個人の人達のつながりから、地域の祭りへと発展してきたところがある。福島県岩瀬郡長沼町で8月、東京品川区の中延商店街で行われている9月のねぶた祭りだ。

そもそもこのねぶた祭りは、11年前に長沼に住む矢部登伸さん、鈴木吉勝さんら、青年団の集いである青連協の人達が始めたもの。彼らが福島の須賀川で行われていたねぶたを見て、借りてきたのが始まり。そのうちに、自分たちでねぶた造りを青森まで習いにいき、独自で造りだすようになった。その数も十数基になって、みんなが参加するようになった。ねぶたは次第に小さい村でのおおきな祭りへと発展していくことになり、祭りの実行委員会も設けられるようになった。その後、製作所の経営者八木沼昭夫さんや、農家の八木沼満さんや大工の奥川洋一さんが、なにもない小さな村で、おもしろふるさと実行委員会」というのを作り、このねぶた祭りを、もっと広げようと動きだした。

そんな頃、品川で町興しをしていた大崎西口の商店会会長の網嶋信一さんが、東京でこそ村興しをすべしと奔走し、山の手線をノンストップで年に一度走らせる『山手線ノンストップ号』を仕立てて地域の新しい祭りを作った。その網嶋さんが、同じような考えの人はいないかと人づてに紹介を受けたのが長沼町の人達だった。早速網嶋さんは長沼に行き、祭りに参加。自分たちで造ったねぶたに感激、これが壊されるのがもったいないと、中延商店街に持ってきた。商店街でねぶたが好評だったことから、さらに招聘が検討されたが、本当の交流をするなら、商店街でも、自分たちのねぶたを造るべきだと網嶋さんが提案。こうして長沼町の人々の指導を受けて、中延商店街でも独自のねぶたが始まった。現在、中延商店街のねぶたは6年。新しいねぶたの祭りは本当の地域の祭りへと発展してきた。そして、町同志の交流は今も続いている。